

# かたりべ71

豊島区立郷土資料館だより



鑑木氏がビルマの戦地から家族にあてて出した葉書



列品の様子②〔Ⅴ豊島区の空襲〕



列品の様子③〔Ⅲ鑑木正義書簡〕



列品の様子①〔Ⅰ戦地での生活〕

## 戦争について考える秋

郷土資料館では、現在、収蔵資料展「戦争と豊島区2——戦地・兵舎から家族への手紙——」を開催しています。この展示会は、一九九五年に開催した特別展「戦争と豊島区」の続編ともいえるべき内容で、戦地や、軍隊での勤務地から豊島区に住んでいた家族へ宛てた手紙を中心に展示しています。

豊島区から出征すると言っても、本籍のある連隊に召集されますので、ビルマ（現ミャンマー）、旧満州（現中国東北地区）、南洋諸島など、配属される戦地は様々です。そこから家族に宛てて、数多くの郵便が行き交いました。家族と出征した兵士を結ぶ唯一の手段だからです。

軍隊には検閲があるので、思いどおりのことがらを、ストレートに伝えることはできません。ですから、兵士はいつも戦地では「元気で頑張つて」いるのです。それでも、よく読み込んでいくと、家族の消息を切望する文面があったり、家族にしか解らない「暗号」を使って戦地での任務を伝えている様子などから、兵士の心情をうかがい知ることができます。

今回展示した鑑木正義かみりきさんの手紙には、甥の成長を楽しみにしながら、自分が「帰る頃には……」と繰り返し述べられています。しかし、残念ながらその思いは果たされませんでした。また、佐藤静子さんに宛てられた永島福次郎さんからの手紙では、特攻隊員としての心情が綴られています。

こうした手紙のほか、一九四五（昭和二〇）年四月一三日の空襲での悲惨な出来事を綴った手記も展示してあります。

今年の秋、ぜひ戦争と平和について考えてみてください。（伊藤）  
◆展示説明会：九月一三日（土）午後二時から◆会期：九月二八日（日）まで◆毎週月曜日と九月一五・一六・二三日は休館日です

# 伊藤伊兵衛と江戸園芸

一〇月八日(水)～十一月三〇日(日)の会期で開催

江戸時代の後半以降、今の豊島区駒込三・六・七丁目あたりは上駒込村染井そめいと呼ばれ、多くの植木屋が植木や草花類を栽培・販売していました。染井の植木屋には植物の購入者や観光客が訪れ、大いに賑わっていたことが、当時刊行された地誌・随筆類の記述や浮世絵に描かれた様子などからもうかがえます。

今回の企画展では、染井の植木屋の中でも、現在の都営染井霊園北東側に居住していた伊藤伊兵衛家を取り上げます。

同家は、江戸で一番の植木屋とまで言われた、江戸の園芸界ではちょっとした有名な人でした。

「伊兵衛」というのは、代々世襲の名前ですが、元禄・享保期(一六八八～一



染井の植木屋が売り広めたといわれる桜「ソメイヨシノ」

七三五)に活躍した伊兵衛三之丞・政武父子の生活と業績を中心に光をあてていきます。日頃の地道な植物栽培や研究の積み重ねの末に執筆された著作、徳川將軍家から下賜かじされたといえられる瓶子へいし一對、一八世紀前半の伊兵衛家の庭を描いた「武江染井翻紅軒霧島之図」などを展示する予定です。

近年のガーデニングブームの原点は、ひよつとすると彼らの活躍や業績に求められるかも知れません。

以下、展示構成に沿って、その内容をご紹介します。おきましよう。

## I 伊藤伊兵衛家の環境

伊兵衛家を取りまく環境について、絵図類を中心に構成します。同家がどこに所在していたのか、また、他の染井の植木屋が、江戸のなかでどのような位置にあったのかを考えます。

## II 伊兵衛三之丞・政武父子の著作

三之丞・政武父子による著作で構成します。父から子へ園芸研究がどのような形で引き継がれ、著作にはどのようなものがあつたのか、また、政武による楓研

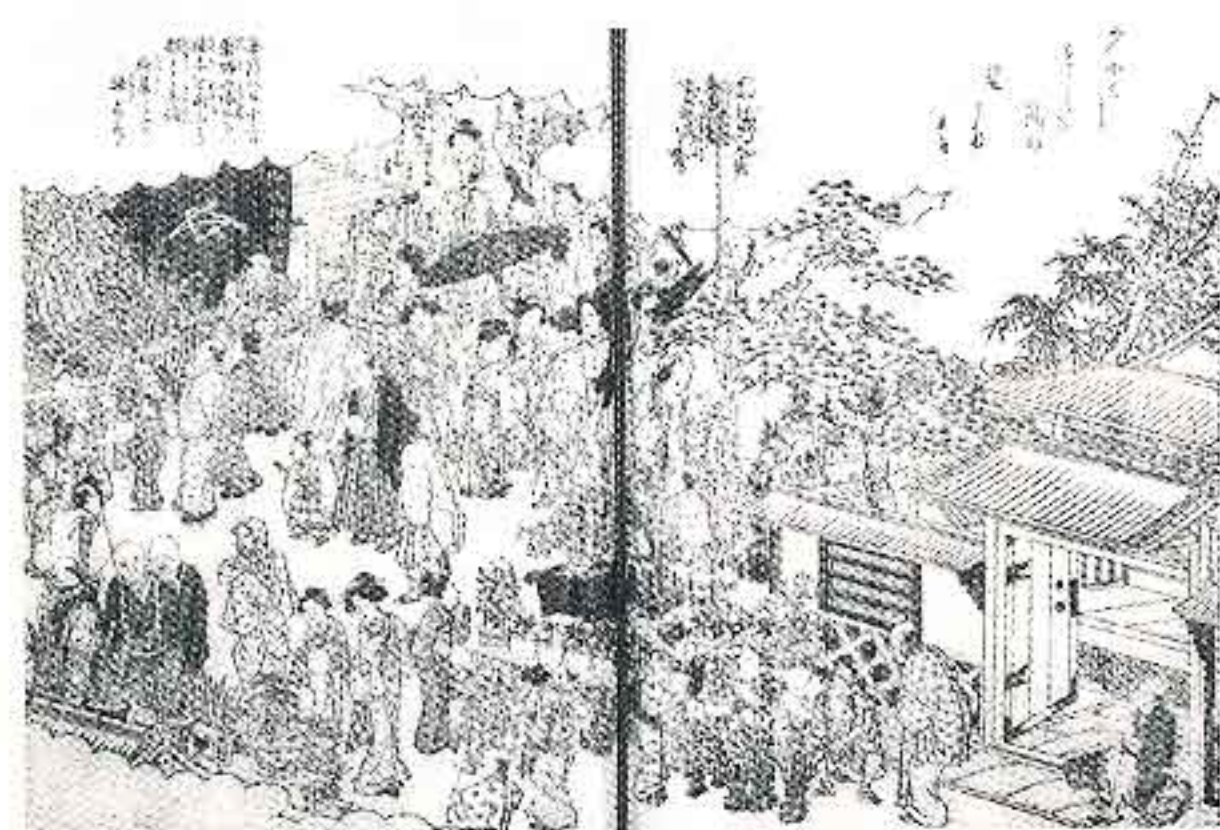
究についても触れていきます。

## III 伊兵衛家の庭空間と生活

著作以外の伊兵衛関係資料で構成します。キリシマツツジ、唐楓とうかえがもたらされた経緯や、徳川將軍家とのつながりについて解説を加えます。また、伊兵衛家があつたとされる場所から発掘された考古資料も数点展示します。

## IV 伊兵衛の評価と江戸園芸

三之丞・政武父子の死後に刊行された伊兵衛に対する評価を示す資料を中心に



天保期発刊の「江戸名所図会」に描かれた植木市の様子

構成します。そして、伊兵衛家の業績や活躍ぶりが、江戸の園芸文化の発展にどのような影響を与えたのかについて明らかにしていきます。

★会期中の一〇月一八日と十一月一五日の一四時から、担当学芸員による「企画展みどころ解説」を実施いたします。展示キャプションからは読み取れない裏話的な内容も盛り込む予定です。ぜひお気軽にお越しください。また、企画展図録『伊藤伊兵衛と江戸園芸』(A4判、二〇頁)も二〇〇円で販売いたします。

ご来館の折にお買い求めください。

(秋山)



現代の植木市にも大勢が繰り出す

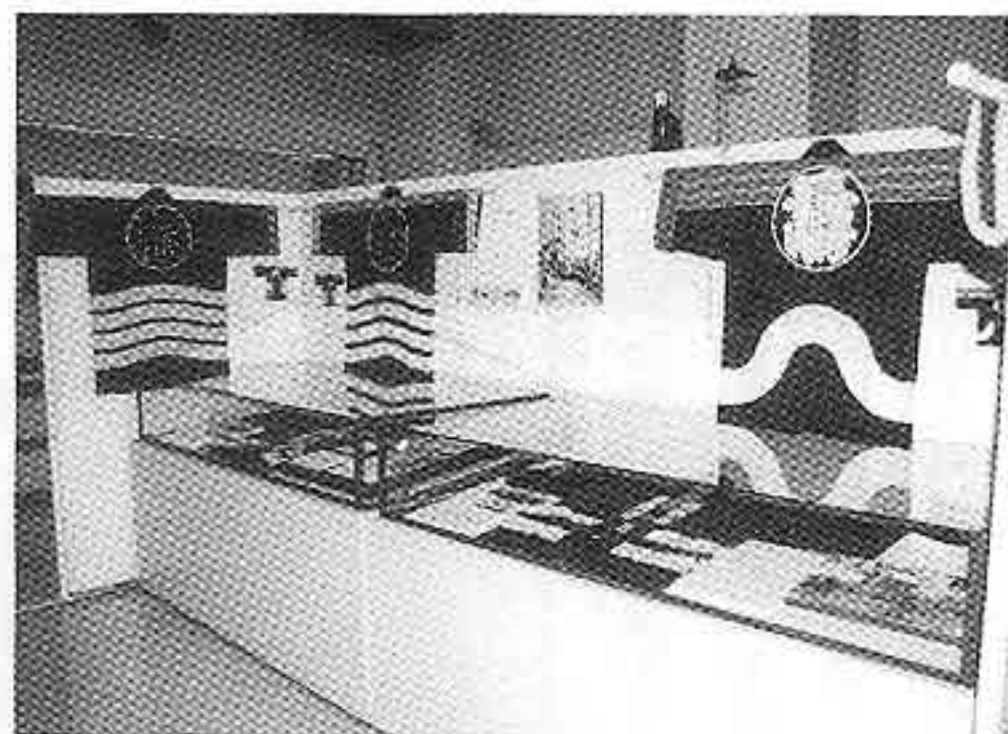
寄贈した人・見たい人・着たい人・作っている人が来館

## 企画展「絆纏はんとん—藍染めの仕事着—」(六月七日〜七月二七日)を終えて

◆「なぜ絆纏がたくさんあるの？」

今回は、約五〇点の絆纏を展示しまし

た。当館が開館した一九八四年から現在までに、区民の方から寄贈されたものです。当初、絆纏を積極的に収集するという方針があったということではありませんでした。二〇年のうちにこれだけのものが収蔵庫の宝になりました。所蔵する衣類のなかには藍染めの絆纏が比較的多くあります。これは、寄贈者が絆纏に対して特別な思いを持っていることの表れでしょう。また、絆纏が生活の歴史や文化を知るための資料として奥深いもの



左2点は鳶職の人(明治37年生まれ)の絆纏。右1点は消防組の人(明治38年生まれ)の絆纏。

であるという証であるからではないでしょうか。

詳しくは、展示図録「絆纏」をご覧ください。ただければ幸いです(A四判・一六頁・二〇〇円。当館・区内図書館で閲覧可能。当館・情報公開コーナーで頒布)。

◆職人さんの助言をいただいて

絆纏に限りませんが、資料として所有者から寄贈を受けるとき、いつ、誰が、どのようなときに使用したものかということをお聞きし、それをもとに説明書きを作ります。しかし、所有者が全てを知っているとはかぎりません。そこで、良く知っている人を探します。元鳶職とびしやくの人が着た絆纏については、区内外の現役あるいは引退された鳶職の方から製作年代を、また、それが地域に存在していた消防組の絆纏と色や模様が似ていることについて、その違いの意味は何かといったことも教えていただきました。それから、消火の際に被る藍染めで刺子の猫頭巾ねこずきんや防火帽については、かつてその製造に当たり、現在はハイテク素材の消防服を製造する渋谷区しやぶくの小林防火服しやぶくへ資料

を持参し、教えていただきました。

こうした専門的な知識を持ってもらえる方たちの助言をいただくことができたのは、たいへんありがたいことでした。

見学者の方には、このような協力を得て展示が開かれているということを知っていただく機会になったことと思います。

◆展示説明会での試み

当館では、身近な地域のことを展示することを特色としています。ですから、「先祖のものが展示されているから見に来た」という元所有者の方がいます。

その一方で、今回の展示資料の性質からなのでしょいか、物作りに関係した人たちの来館が目にとまりました。例えば、

染物屋さん、洋服の仕立屋さんです。また、元鍛冶屋さんや木彫りの人形を製作している人たちもいました。

ところで、来館者が展示を見てどのような感想を持たれるのか。これは、企画者にとつて気になる点です。今回は、展示した絆纏のうちの数点を実際に着用し、資料の体感を試みました。講師は学芸員です。四回の展示説明会は、土曜日の三時から四時の一時間で、開催日と参加人数は、①六月一日・一人、②六月二

八日・九人、③七月二日・五人、④七月二六日・一四人でした。見学者と説明



刺子の臥烟絆纏がえんを前に、現在もその製作に携わる職人の高橋欣也さん(写真中央)が飛び入り解説。予期せぬご好意に参加者は大喜びの展示説明会(6月14日)。

者が資料を媒介に対話し、思わぬことを知る機会にもなりました。当館へは比較的高年齢の方が多く来館されますが、ここで、最も若い年齢の方のアンケートの一部を紹介します。

「保育園の頃や小学生の頃に数回来ました。もちろん家族とも何回も来ています。刺子絆纏が印象に残りました。初めて着ることができ、大変感動しました。絆纏は、三歳の頃からお会式えしき(雑司が谷鬼子母神の祭り)に毎年出て、着ています」(南池袋在住・女性・一七歳・高校生)というものでした。

これからも、寄贈者から受けた多くの資料をさまざまな視点から紹介し、次の世代への継承に心がけていきたいと思ひます。

(福岡)

Q

池袋駅の東側に昔、"ねずやま"という山があったそうですが、それはどのへんで、なぜ今はないのですか？

ねずやま

A

池袋駅東口から護国寺方面へ通る、グリーン大通りの両側、およそ地下鉄東池袋駅手前あたりまでが、かつて根津山と呼ばれていたところですが、今では、想像しにくいことですが、戦前・戦時中までは、うっそうとした雑木林で、昼でも薄暗いところがあり、怪談めいた話があったり、冒険好きの子どもたちの遊び場となっていたりし

ました。

なぜ、根津山といわれたかということ、

東武鉄道や富国徴兵保険会社の経営など、多方面の実業活動で知られた根津嘉一郎

(初代、一八六〇〜一九四〇年)の所有

地であったからです。もともと江戸時代

後期には、このあたりは旗本松浦越前守

(金三郎)の屋敷と抱屋敷でした。その

後の所有者の変遷は分かりませんが、一

八八〇(明治二三)年測量の地図では、

このあたりは桑畑になっています。一九

〇二年の地図では「根津邸」と記載され

て(上段地図参照)いて、この時まで

根津の所有になったことが分かります。

「邸」とはあるものの、根津が居宅をた

てたことはなく、この地図では、「闊葉

樹林」(広葉樹林の昔の言い方)の記号

が書かれています。その後の地図でも、

闊葉樹林と針葉樹林とが混ざっています。

一九二二(大正一〇)年、根津が中心

となって、武蔵高等学校(現在の武蔵大

学)の経営母体として根津育英会が創設

された時、この土地は同会に資産として

寄付されました。武蔵学園記念室編『武

蔵学園史年報』創刊号に、この寄付され

た土地の明細が掲載されています。それ

によると、一部宅地となっていたところ

がありますが、大部分は畑地(一部山林)

という地目になっています。本当に畑が

あったのかは疑問ですが、根津邸は結局

造られなかったようです(高校の職員住

宅を造る考えがあったようですが、これ

も実施されていません)。

この土地が大きく変わる最初のきっか

けは、一九三九(昭和一四)年の市電(

後に都電)池袋線(池袋駅前・護国寺間)

の開通です。これによって池袋・新橋間

が市電で結ばれることになりました。線

路は根津山を分断する形に敷かれ、様子

は変わりました。ただ、この時には両側

の森は依然そのままでした。土地分譲の

希望が出されたようです

が、結局実現しませんでした。戦争中は根津山に

コンクリート製の本格的

防空壕が造られ、一九四

五年四月一三日空襲の時

には、多くの人がここに

避難します。また、現在

の南池袋公園のところは、

空襲死者の仮埋葬地とな

りました。

一九四六年、根津育英会は、この土地

を売却しました。戦後の学校経営の困難

を乗り切るためでした。こうして、根津

山は「根津」と縁を切ることになったの

です。そして、都電通りの両側は急速に

建物が増え並び、戦後復興とともに一大

商業地になっていった、「山」の面影も

失われていきました。

なお、一九七〇年前後に池袋東口に乗

り入れていた都電は廃止され、その後、

線路は撤去されて、現在のグリーン大通

りに生まれ変わりました。(あおき)

\*池袋東口に乗り入れていた都電につい

ては、『かたりべ66号』所収「セピア色

の記憶」を参照してください。



1909 (明治42) 年の実測図 池袋駅の東南方向に「根津邸」とある



1962 (昭和37) 年の池袋駅東口のようす 高木進一氏撮影

# セピア色の記憶

## 第6回 千川上水の「流れ」

ここに示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した昭和二五（一九五〇）年頃と現在（平成一五年八月一日）の長崎五丁目一九番付近の千川通りの様子です。地図に示した\*印は撮影地点を、↓は撮影方向を示しています。

約五〇年間で全く景観が変貌しているので、理解しにくいかも知れませんが、下の写真で、自転車などが写っている歩道部分には、かつて確かに、上の写真にあるような水の流れがありました。千川上水です。

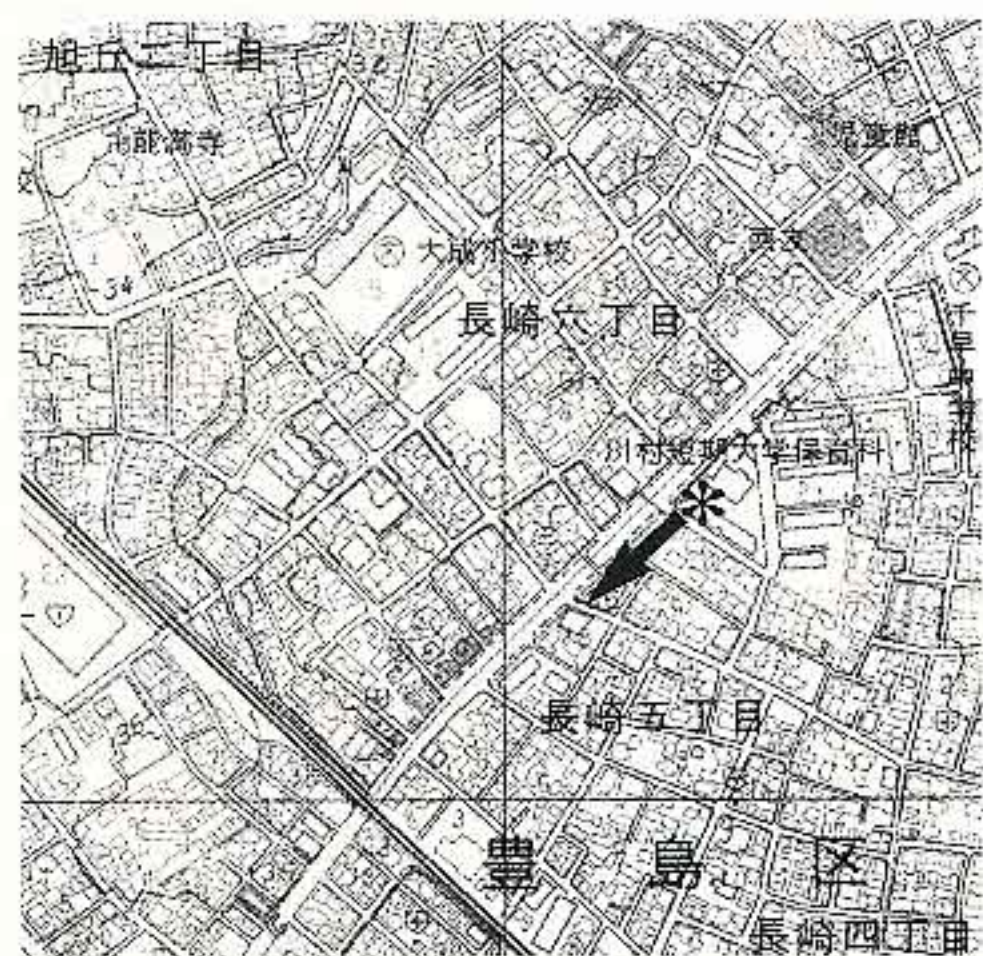
千川上水は、小石川御殿・湯島聖堂・浅草浅草寺などへの通水、および江戸市



中居住者の飲み水を確保することを目的として、千川太兵衛・徳兵衛が工事を請け負い、元禄九（一六九六）年に開鑿されました。玉川庄右衛門・清右衛門らによって承応三（一六五四）年に完成した玉川上水を、現東京都武蔵野市境四丁目付近で分水したものです。分水された上水は、武蔵野市と小金井市との市境を五日市街道に沿って流れたあと、武蔵野市と西東京市との市境を下り、練馬区↓豊島区↓板橋区を経て再び豊島区へ入り、巣鴨の溜池（西巣鴨二丁目三九番街区、現千川上水公園）で本流が終わっています。



元禄九年の開鑿後間もない宝永四（一七〇七）年からは、流域村々の耕地を潤す農業用水としても利用され、明治時代になると、水車を廻す動力として、また製紙工場や製糸工場などの産業用水としても利用されました。しかしながら、氾濫の危険性、汚染による異臭、道路の新設・拡張に伴う用地問題などの面から、すでに戦前期には千川上水の暗渠化工事が進み、写真に示した長崎五丁目あたりも、昭和三〇年代前半には暗渠となり、今のような状態になりました。なお、現在も歩道の下には千川上水（実際には、



「上水」ではなく下水処理水）が流れています。

さて、上の写真を見ると、千川上水沿いに桜並木が続いています。この桜並木の美しさは、江戸時代以来の歴史を持つ玉川上水沿いの名所「小金井」の桜並木に匹敵するというところで、「新小金井」と呼ばれていたそうです。さらによく見ると、上水に架かる橋の上に三名の人の姿を、その左側の建物には、「さくらだんご」と記された看板を確認できます。「さくら」の名称は、当時人々の眼を惹き寄せた桜並木から採ったのでしょう。なお、現在も歩道部分には桜が植えられ、同じ場所に「キッチン さくら亭」が営業しています。

近年、居住環境や「癒し」の観点から、いったん暗渠にした河川を再び明渠にして親水スペースを創出しようという動きが、全国の都市部あちこちでみられます。時代の「流れ」とは言え、水の「流れ」も、人間の都合により、閉じられたり開けられたり忙しい時代になってきました。

（秋山）

\*千川上水の流路については、当館編『千川上水探訪マップ』（豊島区教育委員会、一九九六年、頒価二〇〇円）を参照してください。

# 郷土資料館からのお知らせ

★『豊島区立郷土資料館研究紀要 生活と文化』第13号発刊のお知らせ

学芸員による研究論文五本と、前年度の郷土資料館および旧宣教師館事業報告「年報」から構成されています。

◆掲載論考（掲載順）

①戦時下豊島区時代の

柳原白蓮 〈青木哲夫〉

②伊藤伊兵衛政武と楓研究 〈秋山伸一〉

③旧高田村地引絵図に

関する考察 〈伊藤暢直〉

④職人の集住と拡散 〈福岡直子〉

⑤白泉寺蔵 帝鑑図屏風 〈薬師寺君子〉

◆販売価格 八〇〇円（B五判 九六頁）

★歴史講座「『豊島氏編年資料Ⅲ』を読む

む」（全五回）開催のお知らせ

〔以下、開催日、仮テーマ、講師の順〕

①11月14日 江戸時代の武蔵豊島氏

今野慶信（江東区文化財専門員）

②11月21日 初期代官の豊島氏

蔵持重裕（立教大学文学部教授）

③11月28日 江戸時代の布川系豊島氏

櫻井 彦（宮内庁書陵部）

④12月5日 豊島氏関係縁起について

小林一岳（明星大学人文学部助教授）

⑤12月12日 中世美濃富島氏について

則竹雄一（獨協中学・高等学校教諭）

\*時間はいずれも18時30分～20時30分

\*申し込み方法については、『広報とし

ま』10月5日号をご覧ください。

区民のための

博物館用語の基礎知識

③ジオラマ（仏 diorama）

一八世紀末にフランスで考案された遠近法を用いた展示演出技術のこと。例えば、動物の剥製を単に陳列するよりも、ジオラマによって展示

スペース内に動物と周辺環境を立体的に再現した方が、見学者にとっては理解しやすく、展示効果が高い。

ただし、展示施工コストも高い。

△用例△

学芸員A「うちの展示室のジオラマ

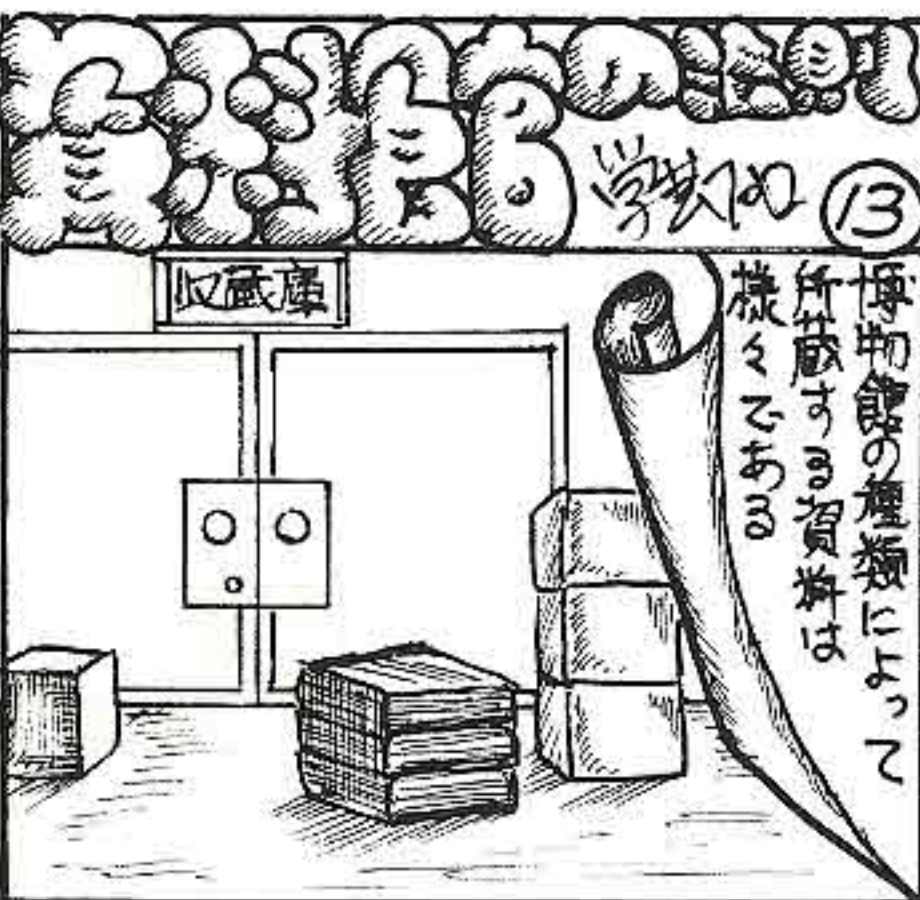
にもそろそろ飽きましたネ？」

学芸員I「それじゃ、ゴジラの模型

を中に入れて、これを機会にジオ

ラマのテーマも変えてみるか。」

学芸員A「何もそこまで……」



## 編集後記

長い梅雨が明け、数日間猛暑が続

き、立秋を迎え、日本列島を台風が

直撃、雨天続きのお盆休みとなり、

再度暑くなり、『かたりべ71号』が

無事発刊。そんな今日この頃です。

今年は、平成五年以来の冷夏で、

凶作の心配もあるとか。今なお記憶

に新しい、現代版「米騒動」が起き

た年からはや一〇年というわけです。

この年、江戸園芸に関する特別展

を担当した編集子が、現在再び江戸

園芸に関する企画展準備作業中です。

「〇〇が江戸園芸に関する展示を担

当する年は、冷夏、はたまた凶作に

なる……」。世の中全体を敵にまわ

しそうで、毎日ビクビクしながら展

示準備が続いています。

（あき）

かたりべ

No.71

2003年9月1日

豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

電話 03-3980-2351